

上田 敏研究

―その生涯と業績―

増補新版

安田 保

上田敏研究

— その生涯と業績 —

〔増補新版〕

成蹊大学教授

安田保雄著

有 精 堂

上田 敏 研究

〔増補新版〕

— その生涯と業績 —



著者略歴

大正三年福島県白河市生まれ。東京大学文学部国文科卒業。現在成蹊大学文学部教授。鶴見女子大学兼任教授。立教大学講師。〔主著〕「上田敏研究」「比較文学論考」

昭和四十四年十月十日 初版発行
昭和四十七年三月十日 三版発行

著 者 安 田 保 雄

発 行 者 山 崎 誠

印 刷 者 株式会社井村印刷所

発 行 所 有精堂出版株式会社

101 東京都千代田区神田神保町一―三九
振替口座東京四〇六八四番
電話(〇三)(二九)一五二―三

序

本書の著者安田氏は中学時代、はじめて岩波文庫本で『海潮音』を繙いて以来、その熱心な愛読者となつたが、後進んで三高に入り仏語を修め、それらの原詩と邦訳とを併せ読むに伴れ、いつしかこれが徹底的研究を志すやうになり、つひに東大に入り国文学を専攻する事となつた。蓋し、上田博士の一切の業績の背後に、豊かな国文学の素養の潜める事は更めて説くを要しない所であるが、わけても『海潮音』には、その語彙・引喩、更に表現の風姿を、わが古典に負へるものが多いので、これを辨へずしては、その十分な理解や鑑賞は不可能だからである。

『海潮音』の精緻な研究に先鞭を着けたものとして今尚權威たる事を失はないものに、島田謹二氏の好著があるが、安田氏の新著は、この先輩が触れなかつた点、或は触れながら、主眼でないため十二分に追究しなかつた点、特に国文学関係のものの考究を徹底させた所に、大なる特色がある。即ち、『海潮音』と古典』または「上田敏と近世歌謡」等の諸章は、その代表的なもので、「上田敏と近代南蛮文学」および「上田敏と文学批評」等は、これに次ぐものと言へよう。若し夫れ、巻頭の「上田敏伝」に至つては、この学匠に関する最初の詳細なる伝記といふべく、われわれはこれによつて、短命ではあるが極めて多彩であつたこの稀有の文芸鑑賞家の、公私の生活を一眸の裡に収め得るのみならず、文壇との交渉をも系統的に辿る事が出来るであらう。

上田博士は、鷗外と並んで、西歐文海の新潮をいち早く紹介移入し、わが文壇や学苑を、たえず、啓蒙・刺激して、清新の氣運醸成に努められた最も信頼出来る一世の先導者であつた。然るに、おそらくは、創作家でなかつたためであらうか、その遺業は、一、二巻の訳詩集を除くの外、広く行はれず、僅に昭和の初、改造社長故山本実彦氏の義侠的出版により、九巻の全集が一度世に出たのみで今日に及んだ。

われわれ、博士の遺業を尊敬し、その深き学恩を感謝せるものは、これを常に千秋の恨事としたのである。然るに、「今や時到了」と言ひ得ないのは遺憾であるが、熱誠真摯安田氏の如き篤学の士により、此度この先覚の詳細なる伝記と研究とを兼ねた好著が完成され、その出版を見るに至つた事は、衷心慶賀の念に堪へない。

最近、明治文学の研究がますます盛になるにつれ、必然的に比較文学的方法を用ゐられる事が多くなつた。されば、斯うした方面に、苟くも関心を有する人は勿論、『海潮音』を繙く程の人は、何人とも、必ずや本書によりて新しく教へられる所が多く、珠玉にも比すべき各篇の一層正しくまた深い理解へと導かれるであらう。

昭和三十三年十月下旬

矢野 峰 人

序

明治時代の象徴詩は西欧の象徴詩を移植するとともに、新古今集や芭蕉の余情を主とする気分象徴詩の伝統をもつゝんで居ると言へるであらう。ともあれ藤村・晩翠の抒情詩から泣菫・有明によつて代表される象徴詩が詩壇の中心になるに至つたのはベルレエヌその他の西欧の詩の移植が直接の動機になつてゐる。さうしてこの移植の上で最も大きい意義を有するのが上田敏の海潮音である。それは西欧詩の移植であるとともに創作詩とも思はれるほど、日本語を自由に駆使し繊細な感受性によつて清新な詩の世界を創造してゐる。海潮音は近代詩歌史上の一つの珠玉であり近代の象徴詩の全盛期を導き出してゐる。上田敏は訳詩において西欧文学の研究と紹介とにおいて輝かしい業績をあげて居る。たゞ比較的早く世を去つたので学問としては中道にしてやんだといふ感がある。

近代文学の研究が盛んになるに従つて明治文人の考察も次第に行はれて来た。鷗外・漱石・藤村その他すでに幾多の研究書を有する作家も尠くないのであるが、ここに、上田敏についても真摯な一考察が今や世に出ようとしてゐる。著者安田保雄君は大学の卒業の際にも上田敏を扱はれたが、それ以来この文人に対して深い愛を以て研鑽怠らずこの一書をなされた。上田敏は典雅沈静の美を喜び細心精緻の学風を理想とし、幽趣微韻を愛したことは、その著文芸論集によつても知られるが、本書の著者もそのやうな学風を理想として居り、敏を扱ふに最も適して居る。本書はこの文人の生涯や業績を

精細に跡づけて組織だてて居るが、方法的にも比較文学の立場から西欧文学との関係について細緻な考察を行つてゐる。

本書が近代詩の研究に寄与する所多いことを信ずるとともに、この書を出発として著者の学業がいよいよ深まりゆくことを期待するものである。

昭和三十三年十一月 庭の紅葉を眺めつゝ

久松潜一

目次

序 矢野峰人 i

序 久松潜一 iii

上田敏傳 三

はしがき 三

第一期（明治七年十月—明治三十年七月） 三

第二期（明治三十年八月—明治四十一年十一月） 二七

第三期（明治四十一年十二月—大正五年七月） 三六

『海潮音』概説 四九

『海潮音』の原典 七〇

『海潮音』と古典 八四

一「あえか」の系譜 八四

ニひうらうら

三朱の曾保船 一一

四むすび

一八

『海潮音』の影響……………二一九

一 はしがき……………二九

二 蒲原有明……………三〇

三 三木露風……………四三

上田敏と近世歌謠……………一五一

一 「ちやるめら」……………一五二

二 「牧羊神」……………一六一

上田敏と近代南蠻文學……………一六九

一 さんた・まりや……………一六九

二 波羅葦増雲……………一七四

三 『聖教日課』……………一八一

上田敏と文學批評……………一八六

一 はしがき……………一八六

二 『文藝復興論集』……………一八六

三 『桐一葉』……………一九一

四 一葉と紅葉……………一九四

雑誌『藝苑』……………二二〇

『海潮音』以後の上田敏と近代詩人	三三
上田敏と夏目漱石	三四
年 譜	三五
参考文献	三六
あとがき	三六
索引	(1-10)

挿 圖 目 次

『うづまき』表紙	二〇	Arthur Symons 譯 Francesca da Rimini	二〇
『耶穌』表紙	二四	タイトルページとダンヌンチオ肖像	二〇
『最近海外文學』表紙	二四	上田敏譯 古代英吉利歌謠 未定稿	二一
『最近海外文學』續編表紙	二六	『海潮音』本文「嗟嘆」	二一
『みをつくし』扉裏とはしがき	二六	『あやめ草』表紙	二二
『詩聖ダンテ』表紙	二七	『糸竹初心集』本文「すげ笠ぶし」	二四
『心』表紙	二八	『松の葉』本文「とりくみ」	二五
上田敏譯未定稿『ダンテ神曲』地獄界第一歌	二九	『小唄』表紙と裏表紙	二六
『思想問題』表紙	三〇	『牧羊神』表紙	二七
『獨語と對話』表紙	三一	『文藝講話』表紙	二八
『マンガラ』表紙	三二	『豊旗雲』表紙	二九
『鬱金草』表紙	三三	『史學研究會講演集』第四冊表紙	三〇
『現代の藝術』表紙	三四	『文藝論集』表紙	三一
『海潮音』表紙	三五	『鏡影錄』・『藝苑』卷第六	三二
Berthon: Specimens of Modern French	三六	『藝苑』(第一次)第壹表紙	三三
Verse 表紙	三七	『藝苑』(第二次)卷第壹表紙	三四
Edmund Gosse: French Profiles 表紙	三八	『詩と散文』創刊号表紙	三五

上田敏研究

— その生涯と業績 —

増補新版

上田敏傳

は し が き

上田敏は明治七年十月三十日東京に生まれ、大正五年七月九日四十三歳で東京に歿したのであるが、今その生涯を略述するにあたり、便宜上次の三期、すなはち、彼の生まれた明治七年十月から東京帝國大學文科大學英吉利文學科を卒業した明治三十年七月までを第一期、以下京都帝國大學文科大學講師となり、京都に赴任した明治四十一年十一月までを第二期、以下彼の歿した大正五年七月までを第三期として、筆を進めて行きたいと思ふ。

なほ、『上田敏全集』補巻の巻末に嘉治隆一、同瑠璃子夫妻の（實際は富田碎花の手になるといふ）「上田敏年譜」があるので、大体それをもとにして、細かな点は年譜にゆづり、私が今日までに知り得た資料で補ひながら傳記をしるして行くこととする。

第一期（明治七年十月—明治三十年七月）

上田敏は、明治七年十月三十日、東京府第一大區十小區（現在の東京都中央區）築地二丁目十四番地に上田綱二けいじの長男として生まれた。その本籍は静岡県有渡郡（後の安倍郡、現在の静岡市）大里村字馬淵三十七番地であつた。

祖父上田東作は文久元年、外國奉行見配役として、修交使竹内下野守、松平石見守の一行に加はつて、福澤諭吉



『うづまき』（明43. 6）表紙
15.0×22.8cm

等とともに渡欧したことがあり、父綱二は幕末の儒者で昌平黉の教授であつた乙骨耐軒の第二子で、明治の英漢學者で沼津に英學塾を開いた乙骨太郎乙（華陽）の弟にあたり、これまた、慶應三年、徳川民部大輔に随從して渡欧したことがあり、後、敏の母、孝子の婿となり、上田家を嗣いだのである。敏は二人の間に生まれたたゞひとりの子であつた。

上田氏は甲斐國巨摩郡上手村の郷士、上田重右衛門より出、遠祖は清和源氏の末流武田勝頼より出たといはれ、また、乙骨氏は信濃國八ヶ岳山麓の本郷村乙事の郷士から出たといはれ（『旅』第二十八卷第五号昭和二十九年五月所載嘉治隆一「高原に人を憶う」参照）、両家とも代々徳川氏に仕へてゐたのである。

父上田綱二は、敏の生まれた明治七年、開拓使に仕官して単身北海道に赴いたが、後、職を辞し、明治十年（敏四歳）、土木局出仕となり、後、静岡に轉任したので、明治十四年（八歳）、敏もまた一家とともに静岡に移つた。それまでは、一時牛込或は下谷に住んだこともあつたが、ずつと東京でその幼年時代を送つたのである。その頃の思ひ出は、彼の自叙傳とも見るべき小説『うづまき』に、主人公牧春雄の名で語られてゐる。

春雄は東京の人である。而も幕臣の裔である。遺傳の傾向と四圍の感化とは、案外に勢力のあるもので、後天の智識が種々の暗示を與へない前から、春雄は稍複雑な性情を具へてゐたらしい。幼年の最も早い記憶は、素より連絡の無い飛々の印象であるが、生れの家の井戸端の鬱金櫻、前を流れる築地川、濱御殿の水門に被さつて茂る大木

の形、逢引橋の霜夜の月に冴え渡る下駄の音、海軍省の原などが後景になつて、新富座の見物から、男に抱れて歸つた或どしや降りの晩や、水上警察の短艇を眺めて遊んだ夏の夕方方が在々と眼に浮ぶ。祖父は維新前、西人の所謂大君使節の一員として歐洲に派遣され、第二帝政の榮華に接し、獨逸を過ぎて、露國冬宮の豪奢をも觀て來た人であるから、宮廷の賜物を土産に持つて歸つた當時には珍らしかつた物品が、春雄の生れる頃迄も幾分か残つてゐた。いろは歌留多を弄ると同時に、羅馬字の書いてある板を積んで遊んだり、藤間の扇を玩弄にして、若い叔母に叱られると、今度は自鳴琴の機關を覗いて見たがるといふやうな經驗は、舊日本の趣味を懷しがる執着心と共に、新文明に對する愛慕の念を小兒心に起した。『うづまき』一二—一四頁、『上田敏全集』第二卷所収）

右の文によつても知られるやうに、彼の一生を通じて見られる江戸趣味と異國趣味との萌芽は、すでに、この幼年時代にあらはれてゐたのである。

當時は所謂文明開化の時代で、その家庭では常に學問、智識、文明、開化等の言葉がくりかへされ、遊戲の時の口ずさみにも、彼は「波のあなたの亞米利加州」を歌ひ、また「吾に自由を與へよ、然らずむば死を與へよ」と何心なく叫んだといふ。

その頃また、彼の叔父が、南校の同窓を二階に連れて來ては、よく西洋の骨牌遊びをして居つたので、皆が大切にうに隠して持つてゐる骨牌札を見ては、それが何か秘密を開く鍵のやうに思はれ、赤や黄や黒に色取つた絵模様をちら／＼と見た時は、それが、平素大好きであつた芳年の日本武將鑑とともに、彼の心をそゝるおもしろいものだったといふ。

また彼は『うづまき』の中に、叔母と一緒に或公使館のクリスマスに行つた時の思ひ出を書いてゐる。

春雄はまた今に冬のある新月の夜を憶出す。築地の家から橋を渡つて、いつも熟知の地藏の縁日の前を通抜け、

御藻の水が黒く光る見附へ入つて、小兒心には随分遠方だと思つた或公使館へ行つた。降誕祭の前の晩で、叔母と一緒に招かれたのである。風が吹き拂つて雲の無い寒空の下に、其邊は歳末の人通も稀な濠邊を歩いて、片側に木を植ゑた斜坂の中途迄來ると、突然横の鐵門へ入つた。檜葉の植込が紆曲つてゐる突當の玄關前はぱつと明るく現はれた。護衛の赤隊が七八騎、遅い馬に跨つて、横の芝生の前に番をしてゐるのは、際立つて記憶してゐる。其次の記憶は頗る曖昧だが、何でも賑かな廣間の中央に、眩い光を浴びて、綺麗な玩弄品を澤山吊した祭の常盤木が立つて居て、丈の高い黒い洋服を着た人が、自分の手を握つて何か挨拶をして呉れた事は覚えてゐる。公使であつたか、譯官でもあつたか、勿論顔は覚えて居ない。『うづまき』一六一―一七頁)

その頃また、牛込にも屋敷があり、月の十日位は山の手に暮したので、招魂社の彼方、竹橋の兵營から聞えて來る夕方の喇叭の音に心ををどらせたこともあつた。また雲が好きで、叔母がアメリカから持つて來た英文の大きな地理書を翻し、萬國の都市の挿画を見て面白がつた時も、一番心を動かししたのはその上にある雲であつたといふ。

この叔母といふのは、彼の母の妹で梯子といひ、醫師であり蘭學者でもあつた桂川甫眞の長子甫純の妻になつたが、後の大山元帥夫人山川捨松、瓜生大将夫人永井敏子、英學塾長津田梅子、吉益亮子とともに、明治四年アメリカに渡航したわが國最初の女子留學生のひとりであつたのである。

明治十四年(八歳)、静岡に移り、静岡県有渡郡(後の安倍郡、現在の静岡市)大里村字馬淵三十七番屋敷に居住した。明治十九年(十三歳)九月、静岡尋常中學校に入學し、同二十年(十四歳)三月、静岡尋常中學校第五級修了、四月、父が大藏省に轉任することになつたので、一家とともに上京し、牛込區矢來町三番地に移り、六月、神田區錦町の私立東京英語學校に入學した。

明治二十一年(十五歳)、父は四十三歳で歿し、この年、彼は第一高等中學校の入學試験に合格したが、父の死の